

貞慶撰『唯識論尋思鈔別要』に見られる命終心思想の意義

序

人が死に往く時ほど、重要な一瞬はない。望む世界に生れうるか悪道に墮ちるか否か。この観点より、古来より「臨終正念」あるいは「臨終来迎」なるものがしばしば論じられた。では、人が死に往くときの有り様とは、はたしてどのようなものであろうか。これについて概説した書として、鎌倉初期の著名な唯識学匠である解脱上人貞慶（一一五五—一二一三）の『命終心事』ならびに『臨終之用意』がよく知られている。いずれも『解脱上人小章集』に収められている小篇であるが、前者の奥書には「海住山御草」とあり、後者の奥書には「笠置の上人」とある。⁽¹⁾

周知のように、貞慶は承元二年（一二〇八）に、笠置寺から海住山寺に移住しているから、これを見るかぎり『臨終之用意』が先に撰述され、次いで『命終心事』が作成されたものと考えてよいであろう。内容的に見ても、世間の人のために書いたと思われる『臨終之用意』は笠置時代の作というにふさわしく、かつまた弥勒のまします知足内院を「浄土ではないが浄土に比肩すべき好妙土である」とする『命終心事』は、弥勒信仰（笠置時代）と決別して観音信仰に帰入した海住山寺時代の作といつてよい印象が濃厚である。したがって、両書の奥書にあるとおり、まず『臨終之用意』が作成され、ついで『命終心事』が撰述されたものと見てよいであろう。⁽²⁾

そのような中、貞慶にもう一点、「命終心」に関する記述のあったことが明らかとなった。いわゆる、建仁元年（一二〇一）に撰述された『論第六卷尋思鈔別要』の中に収録されている「命終心相」がそれである。⁽³⁾ 実は、この科文は『成唯識論同学鈔』ではなく、やや関連性のある記述が

一部、『論第三卷同学鈔』に「未臨命終」と題して収録されている程度であり、短釈類も管見するかぎり皆無であるといつてよい。⁽⁴⁾ いわば、「命終心相」は貞慶がわざわざ紙数をさいて立てた独特の科文であり、貞慶がこの点になみなみならぬ関心を寄せていたことが、これによって知られるのである。なぜ、貞慶は「命終心」というものに、これほどまでの関心を寄せたのであろうか。それは、やはり命終心のあり方が順次生を決定づける大きな要因であったと、貞慶がみていたからではないかと考えられる。

周知のように、貞慶は唯識観こそが出離解脱の要道であり、菩薩の道を歩むためにはまず菩提心を発し、かつ浄土知見の行や大悲の行の実践を行うことが重要であると論じた人物である。そして、菩薩道実践のために順次生には資糧位菩薩所見の浄土である知足内院(弥勒浄土)へ上生すること、かつ晩年には観音の補陀落浄土(同じく資糧位菩薩所見の浄土)へ往生することを痛切に願った人物である。いわば、ここに彼の仏道観の最大の特色の一つがあったといつてよいのであるが、その貞慶が入寂の時には、観音の補陀落浄土が存する西南の方向に向かって静かに端座し、観音の神呪を唱えて没したと伝えられる。⁽⁵⁾ その姿はまさしく、『命終心事』や『臨終之用意』の説示を実行に移した尊いものであったといつてよい。

今回は、新資料である古文獻『尋思鈔別要』所収の「命終心相」の翻刻研究を中心にすえつつ、既存資料の『命終心事』ならびに『臨終之用意』の二点の活字資料をも合わせて用い、貞慶の「命終心」の思想なるものを解明していきたいと思う。

一

貞慶の「命終心」の思想を見るにあたり、まず検討しておくべき書は、既存資料の『命終心事』であろう。この書において貞慶は、命終心に「鹿相現行位」「細相現行位」「悶絶位」の三重のあることをまず明確に指摘している。いわく、

初めには鹿相現行位、明了意識にして三性不定なり。次には細相現行位、不明了意識にして微細に現起し、我愛と相応す。その性は定んで染汚なり(有覆無記)。三つには悶絶位(悶絶とは狂乱に非ず)、唯だ七八の二識のみあり。すでに前六識は悉くみな滅尽す。これを無心悶絶に撰す。⁽⁶⁾

と述べ、この三が結局は明了の意識、不明了の意識、および七・八の二識であることを貞慶は指摘するのである。さらに続けて、

一切の凡夫は、あるいは設い内院に詣で、もしくは浄土に生ずとも、後の二位のその相は必然なり。今、欣うところの正念とは、第一の麁相現行位なり。三性不定の中、不善と無記を離れ、明了の善心に住せんと欲す。⁽⁷⁾

といい、三位あるとはいっても後の二位については自己の意思ではどうにもならぬものであるが、三性不定の麁なる意識については、意思の力で善性に変えることができると貞慶はいうのである。そして重要なことは、この第一麁相現行位における「正念」こそが、いわゆる世にいう「臨終正念」であると、貞慶が明言している点であろう。このような分析をまず行った上で貞慶は、次に臨終時の命終心について論を進めていく。すなわち、

およそ聖教に命終心と名づくるにまた二位あり。いわゆる、本有より中有に向かうものと中有より生有に向かうものにして、おのおの末後心なり。その中の本有の命終心は多分に自体愛を起す。一期すでに極めて、身命を顧恋するが故に。中有の命終心は多分に境界愛を起す。中有の父母等を見て、男女の身に於いて愛と悲とを生ずるが故に、境界愛を起す。⁽⁸⁾

といい、命終心そのものに本有命終心と中有命終心との二種あることを指摘しているのである。そして、本有命終心において有情は身命を顧恋して「自体愛」を起し、中有命終心において当生の男女身を愛悲して「境界愛」を起す、と述べる。周知のように、仏教では生有・本有・死有・中有の四有説が立てられるが、本有の末後心において自体愛を起こして中有へと進み、中有の末後心において境界愛を起こして生有へと進むという『瑜伽論』以来の伝統教学を踏まえた分析がここになされているといつてよいであろう。とはいえ、境界愛の記述には興味深いものがある。当生での男女のあり方に対して愛着や怒りを持つことによって、愛着すべき当生の境界の決定する仕組みが論じられているのである。もっとも、このような「身命を顧恋」したり「男女身を愛悲」したりするのは欲界での事柄に限られるから、この記述は明らかに欲界から欲界に生じる際の自体愛と境界愛をさしたものとみてよい。しかし、貞慶はさらに欲界から色界に生じる際の境界愛についても言及していく。すなわち、

また色界に生ずるにては、宮殿等において愛を起こし生を結ぶ。浄土の蓮台も彼に准じて知るべし。⁽⁹⁾

と述べているのである。そもそも、色界の衆生は諸欲を離れ、男女の別もなく、清浄である。このため、欲界から色界に生じる際の境界愛は、当生の淫事を見て起こすのではなく、天界の勝妙なる宮殿や清らかな浄土の蓮台を見て起こすのであると、貞慶はいうのである。その一方で、欲界内の天界については、

弥勒の宝宮も淫事なき故に、蓮華に生ずるが故に、浄土に同じきなり。自余の欲天はみな、化生すると雖も、父母によりて生じ、なお男女の愛を起こすべし。⁽¹⁰⁾

と述べ、弥勒の宝宮のある知足天(欲界第四天)を除いては、たとえ天界であるとはいっても男女の愛を生じて境界愛を起こす、と指摘している。なるほど、このようにみれば本有から死有へ、死有から中有へ、中有から生有へと進む一連の流れにおいて重要なものは、鹿相現行位であるということになるが、残る二位は本当に考えなくてよいのであろうか。これについて貞慶は、まず悶絶位について次のように述べている。

悶絶の位は、染汚の末那の微細に起こると雖も、潤生の縁にあらざるが故に、置きて論ぜず。⁽¹¹⁾

と。すなわち、悶絶位における染汚の末那は順次生を潤する縁にはならないので考えなくてもよい、と貞慶はいうのである。しかし、今一つの細相現行位については、

細相現行位は、有覆無記の意識にして正潤生と雖も、決定してこれを起すとき、変化浄土・知足内院等も、みな彼によって結生するが故に、遮遣すること能わず。⁽¹²⁾

といい、正潤生である有覆無記の意識が起こったとき、変化浄土や知足内院等にも生を結ぶことになるから、細相現行位の不明了意識もまた、そのような観点からすれば順次生を決定づける重要な因子になるという。ただし、さらに続けて

今はただ本有鹿相現行位に於いて、善業成就するが故に、三宝加被するが故に、正念に安住して、願いの如く終わりを取るなり。⁽¹³⁾

といい、凡夫であるからこそ最期のときの明了意識時の正念にしか道はないことを再度示唆しつつ、このとき善業を成就して三宝の加被を受けることによって、願いのままに今生を終えることができるのと論じているのである。換言すればこれは、臨終時に正念に住することができれば衆生は願いのままに順次の生を手に入れることができる、と貞慶は述べていることになる。本来ならば、なした悪業と末期に起こす渴愛(自体愛・境界愛)のために、欲界内の苦海に堕ちるはずであった衆生が、臨終正念によって「信仰する仏」のもとに生まれ、見仏聞法することができる。このように考えれば、仏道を願う凡夫にとって、臨終正念は最終的な「寄る辺」であったということになる。ここに、貞慶が「臨終心」に着目した理由が存するといつてよいであろう。このため貞慶は、鹿相現行位においてさらに三重あることを示して、大聖の加被による臨終のあり方を強く論ずるのである。すなわち、

六識みな起きるとき、その心ことに明了なり。眼には仏像を見、耳には法音を聞く。自他和合して互いに覚悟あり。五識ようやくに滅して意識ひとり起きるとき、たとい仏を念じ法を聞くと、余の人の知りがたし。ほとんど無心のごとし。凡夫・善知識も随分その益ありと雖も、狂乱の時にはあえてその命にしたがわず。無心の位は、総じてその声を聞くことなし。大聖の化身に至っては、神通方便不思議なり。肉眼たとい掩い、聾瞶の隔つとも、観音の形声は歴々と心に当たる。魔界になんぞ狂わんや。業障の覆うと雖も、権化の教誡にて念々に開悟す⁽¹⁴⁾。

といい、六識がみな生起している時は仏像を見たり法音を聞いたりして覚悟ができるが、末期に狂乱する人は善知識等の教誡を聞くことができない。また、前五識が滅して意識だけがはたらく段階になると、覚悟の人たちも善知識等の声が聞こえなくなり、ほとんど無心のようになる。その次に、本当の無心位に入ってしまうのであるが、こんな我々に対して大聖の加被力は絶大であり、眼も見えず耳も聞こえない状態でありながら、善知識にかわって大聖の形声が歴々と心に至り届き、その教誡によって念々に開悟することができるのであると論じている。

右の引用文の中で「大聖」を「観音」と特定していることから、貞慶が『命終心事』を撰述したのはやはり海住山寺時代であったことが確かめられる。それ以上に注目すべきは、凡夫が本有から死有に向かうとき、善知識の教誡が聞こえなくなったとしても、大聖の教誡を聞いて念々に開悟することができるとして、凡夫の龜相現行位にはたつきかける大聖の加被力というものが強調されている点ではなからうか。思えば、貞慶ほど大聖の加被力というものに深く心を寄せた人物はいない。『仏舍利観音大士発願文』にも、

仏子、最初発心よりこのかた成仏得道の終わりに至るまで、上求下化、因円果満、自利利他、仏道を増進す。ひとえに大聖の擁護に任せ、専ら観音の引接を仰ぐ。⁽¹⁵⁾

と述べられているが、まさに「凡夫の龜相現行位にはたつきかける大聖の加被力」を受けない限りは、渴愛煩惱による輪廻の流れから脱却することができないことを深く理解していたからではないかと考えられるのである。

とはいえ、『命終心事』の記述は限られており、「命終心」のあり方そのものについても十分に言い尽くしたとは言えない。この不備を補ってあまりあるのが実に、このたび新資料として提示した『論第六卷尋思鈔別要』の「命終心相」なのである。本書は、『命終心事』の実に六・七年前に著されており、ここですでに深い研鑽がなされていたからこそ、簡潔な内容である『命終心事』が書きえたのではないかと思われる。そこで次に、『論第六卷尋思鈔別要』の「命終心相」について、翻刻研究を進めていきたい。

幸いなことに、『別要』の「命終心相」は二点現存しており、一本を底本とし、一本を校本として、翻刻研究を行っていくこととする⁽¹⁶⁾。なお、翻刻文下段に「底本→校本」の形で相違箇所を明記したが、矢印「↓」の場合は訓読時に校本を採用、矢印「↑」の場合は底本をそのまま使用としたという意味であるので了解されたい。

二

【原文】

命終心相

卒有来心

於_レ中_レ有_レ起_レ自_レ所_レ除_レ伽_レ路_レ主_レ我_レ於_レ以_レ由_レ此_レ力_レ故_レ所_レ我_レ而_レ無_レ使_レ於_レ自_レ所_レ由_レ以_レ達_レ立_レ生_レ故_レ自_レ所_レ

修_レ到_レ主

未_レ了_レ我_レ而_レ主_レ主_レ過_レ又_レ中_レ新_レ又_レ終_レ便_レ於_レ自_レ所_レ

未_レ我_レ人_レ也_レ希_レ大_レ了_レ起_レ主

修_レ金_レ主_レ以_レ二_レ業_レ引_レ致_レ如_レ海_レ中_レ有_レ故_レ際_レ

中_レ有_レ末_レ心

生_レ於_レ故_レ之

故_レ切_レ中_レ有_レ早_レ有

彼同生有就境不_レ知_レ瑜伽自_レ彼業不_レ得_レ
 生處速見如是種以有情喜于地趣而_レ生處境
 色不_レ礙中有遂_レ生有續起_レ之_レ夫_レ有_レ欲_レ家
 意_レ且可生人中之_レ久人男女和合喜于起其不_レ
 男女生_レ交男_レ力_レ身_レ身即留_レ不_レ境色不_レ礙
 此時即成生有身_レ

【翻刻】

命終心相

本有末心

燈云、潤_{スルニハ}中有起自_レ躰愛、云云。瑜伽論第一云、我愛現行。由此
 力故謂我_レ當無_レ。便愛自_レ躰。由此建立生報、自_レ躰、云云。

燈引之。

末云、謂我當無者邊見中斷見歟。便愛自_レ躰

者我見也。前後問起歟。

中有末心_{俱舍云、此一業引故如當本有形。ユカ等同之。}
 生處形之也。故一切中有必當_註

仏教古文献における唯心思想の総合的研究(1)

「故一切中有必當」↓脚注文。

燈云、潤生有起境界愛、云云。瑜伽云、自於彼業所得

生處還見如是種類有情、喜樂馳趣。即生處境^圖

色所礙中有遂滅、生有統起、云云。已上大旨說欲界內受生相也。

意云、且可生人中之類見人男女和合、喜樂趣其所。

於女生愛受男身。女身返之。若趣身即留其所云境界所礙。

此時即成生有身。

【訓読】

命終心の相

本有の末心。

『灯』に云く、「中有を潤ずるには自体愛を起こす」⁽¹⁾と、云々。『瑜伽論』第一に云く、「我愛の現行なり。この力によつての故に、謂もいて我は当に無かと。便わち自体を愛す。これにより、(中有の)生の報の自体を建立す」⁽²⁾と、云々。『灯』にこれを引く。

末に云く、「謂もいて我は当に無か」とは、辺見中の断見か。「便わち自体を愛す」とは我見なり。前後の間に起こるか。

中有の末心。『俱舍』に云く、「これは一業の引なるが故に当の本有の形の如し」⁽³⁾と。『瑜伽』等、これに同じ。故に一切の中有は必ず当生処の形なり。

『灯』に云く、「生有を潤ずるには境界愛を起こす」⁽⁴⁾と。『瑜伽』に云く、「自ら彼の業の所得の生処に於いて還つて是の如き種類の有情(および屠羊等の事)を見て、(先に習う所により)喜樂して馳せ趣く。すなわち、生処の境界の色に礙えられて、中有遂に滅し、生有統いて起く」⁽⁵⁾と。已上の大旨は、欲界内受生の相を説くなり。

意の云く、且く人中に生ず可きの類は、人の男女の和合するを見て、喜樂してその処に趣く。女に於いて愛を生ずれば男身を受く。女身はこ

「境ノ」↓「境界」

れを返すなり。若し趣の身をばその所に留むれば、境界色に礙えられて、この時すなわち生有の身を成ずと云えり。

- (1) 『成唯識論了義灯』大正四三・七五九・下・八行目。
- (2) 『瑜伽師地論』大正三〇・二八一・下・二五行目。
- (3) 『俱舍論』大正二九・四五・下・八行目。
- (4) 『成唯識論了義灯』大正四三・七五九・下・八・九行目。
- (5) 『瑜伽師地論』大正三〇・二八二・中・一一・一四行目。

【解説】

人の死にゆく時のすがたはいかなるものか。そのあり方（命終心相）を追求するにあたり貞慶は、まず『瑜伽師地論』『俱舍論』『成唯識論了義灯』の三書を引き、「本有の末心」および「中有の末心」についての簡明な解説をおこなっている。

周知のように、輪廻する有的存在について生有・本有・死有・中有の四有説がかねてより説かれてきたが、法相宗の正依の論典である『瑜伽師地論』にはこれをもって「補特伽羅がまさに命終せんとき」のあり方が論じられており、貞慶の論理的根拠の一つとなっている。その中に、衆生が命終を迎えつつも未だ昏昧状態に陥っていない時、長年にわたって積み重ねてきた「我愛」が現れると説く箇所がある。貞慶の引用文の一つは、実にこれに続くものであり、「死有においては中有のあることを見ないので、我はまさに無なるべしと嘆じ、我愛によってただ現在身に深い愛着をもつに至る。これによって中有の果報を得ることになる」とそこには説かれているのである。この文を貞慶は引いて「我当無」は断見であり、「便愛自身」はその後に来る我見であるとの見解を示し、これらを踏襲して法相宗第二祖慧沼が『成唯識論了義灯』において「中有に生ずるのは自体愛による」と明言したことを貞慶はあらためて明らかにしたのである。すなわち、本有の末後心において起す自体愛こそが中有潤生の直接的要因、換言すれば潤生の「呼び水」であることを貞慶は、『瑜伽論』や『了義灯』を根拠に示したのである。

次いで、中有の末心について貞慶は解説していくのであるが、その冒頭において『俱舍論』の文をまず引いている。この文は、死有と生有の間には中有があるとする説一切有部の主張を受けたもので、「中有は当来が生有を引く業と同じ業によって引かれるから、中有の形は当生の本有の

形に同じである」と説かれるくだりである。この文を引いた上で貞慶は、『了義灯』に「生有をもたらすのは境界愛である」という文章のあることを指摘する。そして、この文章が『瑜伽論』にもとづくものであることを明らかにするのである。すなわち、『瑜伽論』には悪業を造る者の中有は「黒黯光・陰闇夜」のようであり、善業をなす者の中有は「白衣光・清明夜」のようである。七日を極めて生縁を得る者から七七日に至ってようやく生縁を得る者までであると説いた後、悪業をなす者は那落迦を感得するとして、貞慶引用の文章を示す。その説くところは、「なしたる業によって得られる生処の有情等を見て喜び楽う心を起こし、馳せ趣こうとするとき、生処の境色のために中有が滅して生有が生じる」というもので、まさに境界への愛着（境界愛）によって生有の生じることが指摘されているのである。その例として貞慶は、順次生に人界に生まれる場合をあげ、説明している。すなわち、順次生に人界に生まれる者たちは、男女の愛し和合するさまを見て喜楽の心を生じ、いさんで人界に趣く。このとき、人界の境界色のために中有のあり方が破られて生有に移行するのであるが、興味深いことに男性を愛好する者が女身を受け、女性を愛好する者が男身を受けるのだと、貞慶は解説している。いわば、欲界での境界愛とは端的に、男女愛にあることが示唆されているのである。かくして有情は、境界愛を呼び水として生有に移行するのであり、このことを貞慶は端的に示したのである。

なお、本節の解説は導入部としてなされたものであり、以降、貞慶は「同界から同界に生じる場合」「下界から上界に生じる場合」「上界から下界に生じる場合」の三つの視点より考察を進めていく。

三

【原文】

從同家生同家
 亦百命終
 新中入故中
 色界有起一中
 天中各列
 天中各列

多行現在月方在也、以死有不足中自謂我

有起自許也

多行資具外院或於妻子亦他有情心皆依
因生略不記之

已上皆能緣、非不緣、境象之同地、他、我、或
業、善、惡、定、異、因、之、門、後、可、名、為、生、處、果、次、又
と、可、為、因、生、和、以、時、必、有、我、又、未、然

同、我、見、者、与、和、我、意、者、將、常、及、と、和、意、因、生、
和、迷、事、果、之、我、之、迷、以、何、和、意、或、極、精、陽、大、師、破
有、人、之、中、即、事、二、或、常、為、同、地、之、境、象、和、因、
和、和、又、非、和、和、之、和、因、生、不、元、二、元、之、和、和、意、後、矣
之、和、和、意、同、時、之、と、不、和、意、者、我、和、意、同、時、又、と、

我、之、和、意、也

吾來動心但自新知任我不知無有今即忘
心因生惑所不之忘今任忘即内時受

〔翻刻〕

從同界生同界欲界中五趣互生或生同趣。色界唯有一趣一地中各別天等互生等也。

本有命終心

多愛現在自身故、燈云、以於死有不見中有謂我無

有起自昧愛。若愛寶具等外境、或愛妻子等他有情心、皆俱潤生。略不說之歟。

已上、皆能緣煩惱所緣境界是同地也。但於五趣、或

業苦立定異因之門。猶可名當生處煩惱歟。又

今所論雖潤生愛、此時必可有我見等歟。

問。其我見者若與愛相應歟。將前後歟。若相應者潤生

愛、迷事煩惱也。我見迷理也。何相應哉。故撲陽大師破

有人之中、理事二惑前後間起、云云。彼雖積境界愛、自

昧愛又准知。燈云、然正潤生不取二見。於此位故亦後無失

云云。位起遮同時也。位若不相應者我愛者同時必可有

我見。如第七識等云云。

答。未勘正文。但自昧愛位我見相應有何過乎。難者

〔其〕↓〔其時〕

〔撲揚大師〕↓〔撲揚〕

〔位〕↓〔此位〕

正潤生惑昧不取二見、為言。位者即同時義歟。

【訓読】

同界より同界に生ず。欲界中の五趣は、互いに惑を生じ、同趣に生ず。色界は唯だ一趣一地の中に各別の天等あって、互いに生ずる等なり。

本有命終心

多くは現在の自身を愛するが故に、『灯』に云く「死有に於いて中有を見ざるを以て、我はあることなしと謂い、自体愛を起す⁽¹⁾」と。若しくは資具等の外境を愛す、あるいは妻子等の他有情を愛する心、みな俱に生を潤す。略してこれを説かざるか。

已上、みな能縁の煩惱も所縁の境界も是れ同地なり。但し五趣の惑・業・苦に於いて、定異因の門を立つは、猶し当生処の煩惱と名づくべきか。また、今の所論は愛を潤生すと雖も、このとき必ず我見等あるべきか。

問う。その我見は、もしくは愛と相応するか。はた、前後するか。もし相応せば、潤生の愛は迷事の煩惱なり。我見は迷理なり。何ぞ相応するや。故に撲揚大師、有人を破す中、理事の二惑は前後の間に起こるといへり。彼は境界愛を積すと雖も、自体愛もまた、准じて知るべし。『灯』に云く、「しかるに正潤生は二見を取らざるも、この位において起すに、また後に失なし⁽²⁾」と云々。「位起」は、同時に遮するなり。もし相応せざれば、我愛は同時に必ず我見あるべし。第七識等の如し、と云々。

答う。いまだ正文を勘みず。但し、自体愛の位と我見と相応すること、何の過あらんや。難は、まさしく惑を潤生するも体は二見を取らず、といわんとす。位はすなわち同時の義なり。

- (1) 『成唯識論了義灯』大正四三・七五九・下・九〇十行目。
- (2) 『成唯識論了義灯』大正四三・七六一・中・二〇〇二二行目。

【解説】

本節で貞慶は、有情が同界から同界へ生じる場合の命終心のあり方について推考していくのであるが、その冒頭において貞慶は、欲界にある時

は引き起こした煩惱によつて同界同趣に生じるのが常態であるが、色界においては天趣一地の中に複数の天界があるので、さまざまな天界に生じる可能性がある」と論じている。

周知のように法相教学においては、欲界・色界・無色界の三界を九地に分けて詳説している。そもそも、欲界とは淫欲と食欲と睡眠欲の三欲が熾烈な世界であり、色界は淨妙な色法のみ存する世界、無色界は色法なく心識のみあつて深妙な禪定に住することができるとされている。これを九地に分けるとき、欲界には地獄・餓鬼・畜生・人・天の五趣の違いがあるものの、いずれに生じてもその心は散心にすぎないので、合して一地とされる。その一方で、色界と無色界の二界はいずれに生まれても定心に住することができるので、それぞれを果報の違いより四地ずつに分けて八地を立てる。いわゆる、色界の四地とは離生喜樂地・定生喜樂地・離喜妙樂地・捨念清淨地であり、無色界の四地とは空無辺處地・識無辺處地・無所有處地・非想非非想處地である。これらの八地に欲界一地を合して九地説を展開するのが、いわゆる法相教学のあり方である。

このような輪廻する三界九地の世界において、貞慶が特に本節を立てて問題としているのは欲界内の自体愛であるといつてよい。人は死にゆくとき、現在身に強い愛着を起し、また自己のさまざまな持ち物や妻子等に対しても愛着の心を起す。これらは皆、能縁の煩惱が所縁の境界を見て起すものといつてよく、いずれも同界同地のはたらきである。しかし、五趣内において起す煩惱には当生處に対して起す煩惱もあり、一定してない。もし、当生處に対して起す場合には我愛(自体愛)と我見とは共に相応して起こるのか否か。この問題を取り上げて展開していくのが本節の問答である。

それによれば、この二煩惱が相応するとした場合にも相応しないとした場合にも、それぞれに問題があるという。まず、相応するとした場合であるが、その際には性質の異なる「迷事の惑である我愛」と「迷理の惑である我見」とが同時に起きるとは考えがたい、という問題が生じる。また、撲揚大師も「前後して起きる」と述べており、相応するとは考えがたいと難ずるのである。一方、相応しないとするならば、第七識は我癡・我見・我慢・我愛の四煩惱と相応して起きている。このような事実があるのだから、相応して起きると考えても何の問題もないと、難ずるのである。

これらの難に対して貞慶は、我見と我愛(自体愛)とは同時に起きると明確に答えている。すなわち、輪廻する普遍的自己に対して執著心(常見の我見)をもったときも、今生の現在身に対する自体愛はやはり同時に起こり、それが呼び水となって輪廻していくことに、何の問題もないと

貞慶は指摘したことになる。これは、前節において「謂我当無」を断見、「便愛自身」を我見（＝常見）としたことをより詳細に説明したものであったといつてよいであろう。

四

【原文】

從下生上

本有命終

不執常又云常懷之因生之也南生北或極何六時
起云我見一知常卒云我之計終云一
云不執常自所執信之我之云云云云我之云
云云云生即云緣地云云云云南生云云
了知我之而因中云云之因云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云

一、了不縁をよ家我久大起是、も現在才全之縁
不

答者有は云、彼我上之縁、縁を才計を我必是、我久
縁地地起、云云、又云、過高中、一透、因、或幸有答、字、但不計、又
起、又云、下、始、を云云、乃、云、云、云、思、云、云、

又三幸、同、如在、縁、家、本、終、生、上、以、国、生、加、是、上、地、縁
縁、家、力、縁、縁、家、力、仍、お、分、中、下、反、お、云、云、上、家、縁、地
又、云、云、才、七、縁、才、八、お、云、云、之、縁、何、お、不、お、云、云、云、云、云、云、云、

例、縁、上、家、縁、我、久、大、起、下、才、我、久、之、云、云、同、地、縁、部、縁
縁、地、上、自、才、在、任、縁、の、我、久、不、亦、云、云、国、生、我、久、云、云、縁
現在、才、是、云、云、才、一、云、云、生、教、方、之、何、運、之、部、縁、云、云、
才、何、二、云、云、上、縁、地、才、云、云、云、云、上、云、云、才、何、我、久、部、縁、云、云、
以、起、云、云、有、縁、地、上、才、何、不、亦、部、縁、地、云、云、云、云、云、云、云、

座藏し下見ふる不れ

中有令終心

大都同本有但金ふり執此執之中有之商中上
身身故以時高此又執示我故下地地界界

故沒能執見此之此又也

同之同中と大有下界の地執又一答故
清見時之も信明地執又嘆歎三也我之
之中地人

【翻刻】

從下生上

本有命終心

所起煩惱必上界繫也。潤生意也。当生地惑故。問。此時若
起上界我見乎。起者寧上界我見計欲界身乎。

若不起者自昧愛位、豈無我見乎。答可起我見歟。所

謂緣未來生即是緣自地者是也。緣當生上界勝身

可起我愛即潤中有身也。問。其時上界亦有緣下地

身乎。若有者已離欲界染。何還計下身為我及起愛

乎。若不緣者上界我見既起。豈於現在身全無緣

義乎。

答。亦有此義故、疏六云、緣欲界身計有我亦是我見

緣他地起、云云。此疏文兩邊答問中、一邊詞也。或本有答宗。但不叶文相歟。況次下就有義者乃至義應思、云云。

又三本云、問○如在欲界命隨生上。此潤生愛是上地繫

依欲界身緣欲界身。仍相分中所變相分是上界繫隨

見分諸第七緣第八相分亦就何故不如等云云。此文所引之

例許上界繫我見愛緣下身我見亦可同。但雖離染

猶現在自身故任緣為我。若不尔者潤生我愛專緣

現在身是常相乎。是一。俱生微劣也。任運也。難緣當

來身。是二。以上雖成此類猶不常途於潤生位者以緣現身可為本故。上界分別我見離染後

現起有緣、現在身知不必妨離染地歟。是三。顯輪集

廣識之。可見。忘而不記之。

中有命終心

大都同本有但全不可起下地我見。中有是當生上

界身故。此時當唯宮殿等現前。於彼可起境界愛。其前

後、設雖起我見皆是三地見也。

問。上界中有既有起下煩惱。何嫌我見乎。答。彼

謗滅時也。其位明起邪見嗔癡三惑。於我見者

无由起之歟。

【訓読】

下より上に生ず。

本有命終心

起す所の煩惱は上界繫なり。潤生の意なり。当生地の惑の故に。

問う。この時、もしくは上界の我見を起すや。起さば、寧ぞ上界の我見なるに欲界身を計るや。

答う。我見を起すべきか。所謂ゆる「未來生を縁ずとは即ち是れ自地を縁ずるなり」というは、是れなり。当生の上界の勝身を縁じて我愛を起すべし。即ち中有の身を潤ずるなり。

問う。その時、上界もまた下地の身を縁ずることあるや。もしあらば、すでに欲界の染を離る。何ぞ還って下身を計って我となし、および愛を起すや。もし縁ぜざれば、上界の我見はすでに起く。豈に現在身において全く縁ずるの義なきや。

答う。また、この義あるが故に『疏』の六に云く、「欲界身を縁じて我ありと計る。また是れ我見なり。他地を縁じて起くるなり」と云々。この『疏』の文は両辺に問いを答ずる中の一辺の詞なり。ある本に答の字あり。但し、文相に叶わざるか。況んや次下は「然るに有る義は……乃至……」と。この義、応に思うべしと、云々。⁽²⁾

また、『三の本』に云く、「問う。……中略……欲界にあって命終わって上に生ずるが如し。この潤生の愛は、是れ上地繫なり。欲界の身によって欲界の身を縁ず。よって、相分中に変ずるところの相分は是れ上界繫なり。見分に從うと説く。第七の第八を縁ずる相分もまたしかり。何が故

に如かず」等と云々。⁽⁹⁾ この文の引く所の例は、上界繋の我見を許す。愛は下身を縁ず。我見もまた同じなるべし。但し、染を離ると雖も、猶し現在の自身の故に、縁に任せ我となす。もししからずんば、我愛を潤生して専ら現在身を縁ずるは是れ常相なるや。是れ一。俱生は微劣なり。任運なり。当来の身を縁じがたし。是れ二。以上、この類を成ずと雖も、猶し常途にあらず。潤生の位においては、現身を縁ずるをもって本となすべきが故に。上界分別の我見は、染を離るるの後、現起して現在の身を縁ずることあるべし。知んぬ、必ずしも染地を離るを妨げざるか。是れ三。『顯輪集』に広くこれを誡す。見るべし。忘れてこれを記さず。

中有命終心

大都是本有に同じ。但し、まったく下地の我見を起すべからず。中有は是れ当生の上界身の故に。この時、まさに唯だ宮殿等のみ現前し、彼に於いて境界愛を起すべし。その前後は設い我見を起すと雖も皆、是れ上地の見なり。

問う。上界の中有にすでに下の煩惱を起すことあり。何ぞ我見を嫌わんや。

答う。彼は滅の時を謗るなり。その位には、明らかに邪見と瞋と癡の三惑を起す。我見に於いては、これを起すによしなし。

- (1) 『成唯識論述記』大正四三・四四八・下・九行目。
- (2) 『成唯識論述記』大正四三・四四八・下・十行目。
- (3) 『成唯識論述記』大正四三・三二三・中・二二行目。

【解説】

前二節において欲界内を輪廻する我々凡夫のあり方を明らかにした貞慶は、本節では論を一步進めて「下界より上界に生ずる際の本有命終心相と中有命終心相」について論じていく。いわゆる、欲界から上二界の天界に生じていく場合の有情のあり方を明らかにした箇所が、本節であるといつてよい。

これを論ずるにあたり、まず貞慶は「下界から上界に生ずる際の煩惱」はみな、当生地を生ぜしめる煩惱であるから、すべて上界に繋属する煩

悩であることを明らかにしている。これらの煩惱はすべて第八阿頼耶識に一生かけて熏習されてきたものであり、それが上界繫であるために、順次生において上界に生まれることになるのは自明の理である。いわば、同じく三界迷苦の世界を輪廻する者が、なぜに欲界に生まれ、また色界や無色界に生まれるのかという問題は、実に煩惱の界繫問題にあったといつてよいのである。

この観点より貞慶は、以下に二つの問答を展開していく。すなわち第一問答は、上界の我見を起こすなら上界の身を縁するはずなのに、なぜ下界（欲界）の現在身を縁じて我愛を起こすのか、と問うものである。これに対して貞慶は、順次に生ずる上界の勝身を縁じて我愛を起し、中有に入るのであるとのみ答えている。そこで次に第二問が設定され、それならば上界における我愛は今の我が身である下地の身をも縁することがあるのか否かと、重ねて難を立てるのである。これに対して貞慶は、端的に「ある」と答え、『成唯識論述記』等の文を例証として引いた後、上界の我見は下界の染（欲界の煩惱）を離れているといつても、よく現在身を縁するものであることを論証していく。

これらの二問答は、輪廻する有情が中有に移行する際の呼び水となる自体愛が、上界に生まれる場合にはどうなるのかを論ずるものであったといつてよい。周知のように、法相教学では「二世一重の縁起」を説く。すなわち、無明のままの生存を続けてきた有情の阿頼耶識には輪廻の因となる悪業の種子が蓄積されており、これが愛・取という渴愛煩惱によって潤生され、順次生の苦果を受けるといふ輪廻の流れが説示されている。このとき示される愛・取（麤と細の二レベルの渴愛煩惱）こそが自体愛や境界愛といわれる渴愛煩惱そのものであり、直接的には自体愛が呼び水となって中有に移行し、境界愛が呼び水となって生有に移行するわけである。しかし、この「二世一重の縁起」説では、下界から上界に行く有情がどうなるのかまでは、わからない。貞慶はこの点を明らかにしたのであり、上界繫の煩惱を持つ有情は上界の殊勝身を縁じて我愛（自体愛）を起こして中有に移行する、と述べたのである。しかし、このような有情は同時に現在身をも縁じ、これに対しても我愛（自体愛）を起こすことが指摘されている。したがって、下界から上界に生じる有情は、まず第一に順次生の殊勝身を縁じて自体愛を起こし、また第二には現在身をも縁じて自体愛を起こし、中有に移行するということになるのである。

次いで貞慶は、このような有情が生有へ移行する時にはどうなるのかを論じている。それによると、おおよそは本有の時と同じだが、中有から生有に移行する時には「下地の我見」は起きないという。なぜならば、中有はすでに当生の上界身に属しているからであり、この前後に起こす有情の我見はすべて上界の我見に限られるという。そのような有情の眼前に上界の宮殿等が姿を現わし、有情はこれに対して境界愛を起し、ついに

生有に移行することになるのである。

このあと貞慶はさらに一問答を設けて、上界へ移行する直前の中有において「下の我見を起こすことはない」と重ねて論じるのであるが、本節の論述によって中有は当生に属する存在であり、したがって上界の中有においては最早、下界の我見が尾を引いて影響を与えることがないことが明らかにされたといつてよいであろう。

五

〔原文〕

徒上々下

本有令終心

地下為生地、其個生いゝや也。一我入二我起三場
に初也。同は我見縁何の地之縁上、乃復生我見
ふ計地限りの我見也。其地我見が起計上
を力する我、本有令終心起り、乃復生我見
を自解也。が縁を力する我、乃復生我見

盡此後非他乃即意以果實貴青蓮下緣懷地

常

別尋之難除之此下地才九空速以我見我善知
修如五原耳相表起之我之時下緣上界二相終我
見其緣地地以之我善不知去速以我之我

世道不復何不_レ下_レ後之_レ海_レ者_レ無_レ淨_レ地_レ沒
云云哉

未_レ盡_レ乃_レ非_レ計_レ但_レ知_レ起_レ已_レ法_レ律_レ致_レ結_レ迷_レ下_レ或_レ我_レ見
得_レ非_レ義_レ乃_レ甚_レ高_レ者_レ之_レ大_レ法_レ下_レ深_レ乃_レ中_レ得_レ現_レ起
之_レ甚_レ非_レ有_レ幾_レ付_レ起_レ大_レ有_レ數_レ必_レ不_レ知_レ彼_レ超_レ越_レ不_レ達
見_レ即_レ知_レ下_レ乃_レ新_レ我_レ之_レ色_レ俗_レ伴_レ致_レ移_レ也_レ乃_レ非_レ來
以_レ我_レ見_レ乃_レ新_レ乃_レ力_レ從_レ妻_レ竭_レ之_レ乃_レ

【翻刻】

從上生下。

本有命終心

起下当生地煩惱潤生。此有四惑。一我見、二我愛、三慢、

四無明也。問。彼我見緣何為境。不可緣上身、俱生我見

不計仏地現行為我故、如上。答。下地我見於上地起時、計上

界身可為我。本有命終心起自躰愛、謂我當無便

愛自躰故也。於欲界劣身愛猶之。自上界没將墮下

地乎。但惣緣我見故惣緣現在身為我無過。准上。

今所疑者有義意也。而疏於上起下惑舉六惑。我見

其一也。演秘成其心畢、潤生我見拋惣緣證、云云。但本疏

起下六積不正義歟。故演秘續文、故五六積取捨任情、云云。

已雖引有義破所之積。猶不捨起五之義。爰知、計他地

現行之義雖有云事、惣尋之俱生我見。緣他地現行

者違對法論文云、不見世有緣他地現行執為我故、云云。

又疏之積惣緣諸行執我之所文意、和離自躰惣計

為我。文。謹計沈隱種子云事。況捨義於過之現行

為境顯能緣隨彼繫。種子境沈隱能緣繫不隨

云云。計現行旨、諸文所不許也。如何。

答。對法論者依別緣我見談之也。要積所於過不必

「如上」↓「為言」

「愛猶」↓「猶愛」。「自」↓「況自」

「所」↓「疏」

「雖」↓「難」

「文」↓「文云」。「有」↓「間」

「意」↓「々」

「我。文」↓「我。即上界種子等此也。不

計現行故文。知瑜伽論和云離自体文」

「況捨義」↓「況枢要」

盡理。設雖何道理、豈以異界煩惱青隨所緣繫他

界乎。

別尋云、離染之人。起下地第九六迷理我見哉。若起者

修得天眼耳根者起其我見時可緣上界二根。俱生我

見、豈緣他地現行法哉。若不起者迷理我見既非

世道所談。何不起之乎。依之先德尊應許起之。設

會之哉。

末云、此事難計。但難起歟。已伏伴類諸迷事惑。我見

獨雖殘其力。甚羸劣也。大伏下染之身中獨現起。

其甚難有。況付起既有疑。不如云不起也。彼超越不遠

見道智下進斷我見是依伴類故也。万知雖未

伏我見自躰。其力猶萎竭云事。

【訓読】

上より下に生ず。

本有命終心。

下の当生地の煩惱を起こして潤生す。これに四惑あり。一つには我見、二つには我愛、三つには慢、四つには無明なり。

問う。彼の我見は何を縁じて境となすや。上の身を縁ずべからず。俱生の我見は、他地の現行を計って我となさざるが故に。上の如し。

答う。下地の我見をば上地において起こすとき、上界身を計って我となすべし。本有命終心の自体愛を起こすは、「我はまさに無かと謂いて便わち自体を愛す」⁽¹⁾が故なり。欲界の劣身において、猶しこれを愛す。況んや上界より没してまさに下地に墮するにおいてをや。但し、惣じて我見を

「異」↓「是」。「青」↓「責」

「六」↓「品」

「万」↓「方」

「力」↓「身」

縁するが故に、惣じて現在身を縁じて我となすに過なし。上に准ず。

いま疑うところは、有る義の意なり。而るに『疏』に、上において下惑を起こすに六惑を挙ぐ。我見は、その一なり。『演秘』にその心を成じ畢って「潤生の我見は惣縁に拠って証す」と云々。但し、『本疏』の「下の六を起こす」の釈は、必ずしも正義にあらざるか。故に『演秘』の結文に「故に五と六の釈、取捨すること情に任せよ」と云々。すでに有る義の破する『疏』の釈を引き、猶し捨てずして五の義を起こす。ここに知んぬ、他地の現行を計るの義、有り難しという事を。惣じてこれを尋ねれば、俱生の我見は他地の現行を縁ずというは『対法論』の文に違す。文に云く、「世間を見ずして他地の現行を縁じ、執して我となすが故に」と云々。また、『疏』の釈の「惣じて諸行を縁じて我・我所と執す」の文の意は、和やかに自体を離れて惣じて計って我となすなり。すなわち、上界の種子等、これなり。現行を計ざるが故に。知んぬ、『瑜伽論』の「和云離自体」の文、僅かに沈隱の種子を計るということ。況んや『枢要』に過を出して云く、「現行をば境となすは、顯らかに能縁をば彼に随えて繋するなり。種子(等)の境は沈隱にして、能縁の繋に随わず」と。現行を計る旨、諸文に許さざるところなり。如何ぞ。

答う。『対法論』は、別して我見を縁するにより、これを談ず。『要』の釈に出すところの過は、必ずしも理を尽くすにあらず。設い何の道理と雖も、豈にこの界の煩惱をもって、所縁に随えて他界に繋ぐことを責むや。

別に尋ねて云く、染を離るる人は下地の第九品の迷理の我見を起すや。もし起こさば、天眼耳根を修得する者あって、その我見を起すの時、上界の二根を縁すべし。俱生の我見、豈に他地の現行法を縁するや。もし起こさざれば、迷理の我見はすでに世道の伏するところに非ず。何ぞこれを起こさざるや。これにより先徳尊応、これを起こすを許す。設しやこれを会するや。

末に云く、このこと計り難し。但し、起き難きか。すでに伴類の諸の迷事の惑を伏す。我見ひとり残ると雖も、その力はなほだ羸劣なり。大いに下染を伏するの身中にひとり現起するとは、それ甚だありがたし。況んや起きるについてはすでに疑いあり。これを起こさずというにしかず。彼は超越して遠からず見道智の下、進んで我見を断ず。是れ伴類によるが故なり。まさに知んぬ、いまだ我見自体を伏さずと雖も、その力は猶し婁竭という事を。

(1) 『瑜伽師地論』大正三〇・二八一・下・二五行目。

- (2) 『成唯識論演秘』大正四三・九二三・下・一四行目。
- (3) 『成唯識論述記』大正四三・四五四・上・一行目。
- (4) 『成唯識論演秘』大正四三・九二三・下・二二～二三行目。
- (5) 『対法論』大正三一・七二三・上・七行目。
- (6) 『成唯識論述記』大正四三・四五四・上・二三行目。
- (7) 『成唯識論掌中樞要』大正四三・六三九・上・二四～二五行目。

【解説】

本節では、上界の有情が下界に生じる際の本有命終心のあり方が述べられている。なぜ上界の者が下界に生じてしまうのか。もちろんそれは、上界でなした悪業の結果に他ならないが、実際に下界に生じるといふ際にはやはり、当生地の下界の煩惱を引き起こし、これが呼び水となって中有を潤生する、と貞慶は指摘する。このとき引き起す下界の煩惱は、今まで論じられてきた我見と我愛の他に、慢と無明とがあるという。要するにこれは、第八阿頼耶識を見て我と執する第七の末那識と共に起こるとされる四煩惱に他ならない。その中でも本有から死有、死有から中有へと移行するときに重要な役割を持つのは、やはり我見と我愛（自体愛）であるといつてよい。

そこで貞慶は第一問答において、そのとき起こる我見は何を縁じるといふ問いを立てたのであるが、これに対する答えは端的明瞭なものであった。すなわち、下地の我見であったとしても、その我見は上界の現在身を縁じて我となすというのである。そして、欲界の劣身に対してさえ有情は強い自体愛を起すのであるから、上界の殊勝身に対してはなおのこと強い自体愛を起すことになる、と貞慶は指摘しているのである。

上界から下界へ輪廻する際の命終心相については、この一問答によってすべて説明し尽くされたといつてよいが、その後、貞慶は『述記』や『演秘』に見られる「四惑」ならぬ「六惑」の表記をめぐる問答と、天眼・天耳を修得する者に迷理の我見が起こるか否かの問答の二つを展開している。前者においては能縁の煩惱が他界繫であることに何の問題もないと指摘し、後者においてはたとえ伏しないといつても羸劣な迷理の我見がひとり起きることはなく、このような我見は見道智において断じられるべきものであると述べている。

結

『尋思鈔別要』の「命終心相」が著されたのは、建仁元年（一二〇一）冬、貞慶四十七歳の時のことである。当時の社会情勢からいえば、四十七歳という年齢は「死」への不安の現れ始める頃合いでもあり、かつ順次生に知足内院への上生を願う弥勒淨土信仰を理論化した頃でもあったので、あらためて「命終心」についての見解をまとめてみる必要性を感じ、書き上げたのが本篇「命終心相」ではなかったかと思われる。したがって、本篇の構成が ①総論 ②同界より同界 ③下界より上界 ④上界より下界 の四節よりなるとはいつても、その中心はあくまでも「欲界内にある我が身の命終心」にすえられていたといっても過言ではないのである。

そもそも、有情が輪廻していくとき、第八の阿頼耶識に熏習された業種子の助けをかりて無覆無記の阿頼耶識が現行して順次の生を結ぶことは、インドの昔より縷々、説かれてきたことである。唯識説が大成される以前の論書である世親の『俱舍論』を見ると、すでに部派仏教の時代において、釈尊の自内証の法門である十二縁起を解釈して、三世兩重の縁起説を展開していたことが知られるし、また四有説や四生・五趣などの諸説によっても、有情輪廻のあり方を深く考察していたことが知られる。

これらを受けて大乘唯識説では、二世一重の縁起説を展開し、さらに四有説をも用いて阿頼耶識を中核にすえた輪廻のあり方を論ずるようになった。いわゆる二世一重の縁起説とは、無明より有までを過去世（もしくは現在世）の因と見、生・老死を現在世（もしくは未来世）の果と見るものである。すなわち、「無明」のままに行った「行為」は業種子として阿頼耶識に熏習される。その一方で、阿頼耶識には当生の阿頼耶識自体を生ぜしめる親因縁の名言種子が内在している。これが十二有支というところの「識」である。同様に、阿頼耶識には当生の異熟の果報（生・老死）を生ずべき「名色」から「受」までの五支の名言種子もまた、内在している。しかし、阿頼耶識を生じる種子の力は非常に弱く、現行するためには必ず業種子の資助を受けなければならない。しかし、その業種子は無明による行為によって熏じつけられたものばかりであり、このため悪業深きわれわれ有情は、輪廻のその時に地獄等の三惡道に生じてしまう結果となるのである。

では、輪廻の移行はいつ起こるのであろうか。右の二世一重の縁起説によれば、有情が命終の時を迎えると、「愛」「取」が起こるといふ。いわゆる、「愛」とは第六識相應の俱生起の「觸」の貪愛のことであり、「取」とは第六識相應の俱生起の「細」の貪愛ならびに他の一切の煩惱

ことである。これらが、今まさに命終せんとする有情の第六意識におこるのであるが、その折りの意識について貞慶は『命終心事』において、細相現行位と麁相現行位のあることを指摘した。いわゆる、細相現行位は不明了の意識のことであり、麁相現行位は明了の意識のことである。前者は唯染性(悪性)であり、後者は善・悪・無記の三性に通じるという。したがって、細相現行位の意識においては細の貪愛および余の一切の煩惱が並起するから、有情には為す術がないということになる。これに対して、後者の麁相現行の意識においては麁の貪愛も起るが、善や無記の心も起る状態にある。したがって、麁相現行の意識こそが、有情輪廻のあり方を左右する要になると貞慶は見たのである。そこで、『臨終之用意』に、

人の命不定なり。平生なをたのみかたし。況や病中をや。よりより油断なく、臨終正念をねがうべきなり。最後の妄念は惡道の業。一切世間の事。殊更に病人の執心すべき事。腹立つべき事。貪愛すべき事等、かたるべからず。⁽¹⁷⁾

といい、臨終正念こそが重要であると説いた。そして、最後の妄念は惡道に墮ちる業となるので、執心や忿怒・貪愛などを起さないよう、家人は注意しなければならないとまで諫めている。また、

病人の心とどむべき資財など、ちかづくべからず。魚鳥を食し酒に酔い、葱韭など食したらん人をば、いかにしたしき人なり共、門の内にも入るべからず。天魔たよりを得て、心乱れて惡道におつるゆえなり。総じて問來人の出入一に病人にしらすること、返す返すも故実になきことなり。⁽¹⁸⁾

といい、資財や他有情への貪愛を戒めているが、この点などはまさしく「命終心相」に説かれる記述に準拠しているといつてよいであろう。そしてさらに、

病人の問事ならば、心にさわらざるように語るべし。語り終わらば、何事も皆皆夢なり。神呪忘れ給うなとすすむべきなり。……病人の居どころには、何にても信仰の仏をすえ奉り、常によき沈香をたき、病人余念と見つけば、約束にまかせて神呪にても宝号にても觀にてもあれ、すすむべきなり。……まさしく唯今と見ゆる時は、本尊を病人の目の前にむかえ、耳のかたわらによりて、臨終只今なり。來迎の聖衆光明かくやくとして、ここに來たり給えり。神呪唱え給へと、病人の息に合わせて、早からず遅からず、神呪をとのうべきなり。すでに終わりと後に、一時ばかりは耳に唱えいるべきなり。おもては死する様なれども、そこには心あり。或いは魂さりやらずして、死人のほとりにありて、

称名きぎぬれば、かれ惡道に入るべきものなれ共、中有よりあらためて淨土に生まるるなり。⁽¹⁹⁾

といい、今まさに死なんとする人の居所には信仰する仏を据え、常に神呪や宝号などを勧め、その時が来たら「只今だ」と知らしめて、病人の息に合わせていっしょに神呪を唱えよと教えている。また、表面的には死去したように見えても、心はまだあるので、絶やすことなく称名を続けよ。そうすれば、信仰する仏の功德によって惡道に墮ちることなく、中有より淨土に生ずることができであろう、と論じている。そもそも淨土とは、煩惱を断じ尽くして第八識が淨らかになったときに現われるものであるが、諸仏如来は大慈大悲のはたらきによって、眞実の淨土に相似た勝れた清淨世界を有情のために示現して下さる。地獄必定の身がそのような勝れた世界に生まれるということは、諸仏如来の広大な恩徳、加被の勝れたまものであるといつてよい。臨終の行儀による「臨終正念」によって、そのような不思議が生じるのであると、貞慶は教示したのであった。

では、もしこのような臨終時の努力を怠れば、人はどうなるのであろうか。これについて「命終心相」には、

多くは現在の自身を愛するが故に、『灯』に云く「死有に於いて中有を見ざるを以て、我はあることなしと謂い、自体愛を起す」と。若しくは資具等の外境を愛す、あるいは妻子等の他有情を愛する心、みな俱に生を潤ず。略してこれを説かざるか。⁽²⁰⁾

といい、自己のみならず財産や家族等の外境に対しても貪着して強い自体愛を起こしてしまい、中有へ移行することになると説いた。これを二世一重の縁起論より見ると、ひとたび自体愛に支配されるや有情は、羸劣な阿頼耶識（識支）の種子とこれを資助する強勢な業種子（無明支）とを潤生してしまい、順次生に苦果を引く「有」の状態に移行する、ということになるであらうか。この「有」こそが、中有に他ならない。かくして、母胎に託生して「名色」から「受」までの現行をみ、ここに老死に至る未来当生の一期が始まることになるのである。

中有という概念は、もともと説一切有部が説いたものであり、四有の一つである。いわゆる四有とは、有情が生を受ける瞬間の生有、生きている間の本有、死にゆく瞬間の死有、次の生を結ぶまでの間の中有をいう。このうち中有の存否については、かつて部派仏教内でも分別論者（大衆部・説出世部・鷄胤部・化地部など）との間で論争があったというが、しかし『瑜伽論』が成立した頃にはすでに中有の存在は広く容認されており、早いもので七日、遅いもので四十九日の中有の時を経て、生有へ移行すると説かれるようになった。では、中有の形とはどのようなものであろうか。これについて『俱舍論』には、

此れは一業の因なるが故に、当の本有の形の如し。⁽²¹⁾

と述べられている。要するに、同じ業によって引かれるので当生の本有の形と同じであると、論じているのである。

この中有の時を経て、有情は境界愛を起こして生有へと移行する。有情がまさに死にゆかんとする時は、自体愛を起さないように細心の注意をし、信仰の諸仏への結縁を遂げれば浄土往生も可能であった。ところが、ひとたび自体愛を起こしてしまうとすぐさま中有へと移行し、今度は否も応もなく境界愛を起こしてしまうことになる。この必然性を貞慶は、『命終心相』において縷々、述べているのである。それによると、同界より同界へと輪廻する場合の例を人趣に求め、

人中に生ず可きの類は、人の男女の和合するを見て、喜樂してその処に趣く。女に於いて愛を生ずれば男身を受く。女身はこれを返すなり。若し趣の身をばその所に留むれば、境界色に礙えらると云う。この時すなわち生有の身を成ずるなり。⁽²²⁾

といい、男女の和合するさまを見て喜樂して趣き、男性が好きなものは女性となり、女性が好きなものは男性の身を受けることになる。論じているのである。この記述は、「当生の父母等を見て男女身において愛と悲を起すことによって境界愛を生じる」としか記していない晩年の『命終心事』に比して、より詳細である。これを見るかぎり、有情が欲界に生を受ける最も直接的な要因は、男女愛という境界愛にこそあったということが出来るであろう。このように考えると、出家の戒に不淫戒が設けられている、もう一つの意義も明らかになるのではなからうか。

『尋思鈔』の「命終心相」には、さらに欲界から上二界へ輪廻する場合と上二界から欲界へ輪廻する場合の二つのあり方が説かれ、その際にも自体愛と境界愛が起こることが指摘されている。これらもまた、貞慶による詳細な検討の成果であるが、しかし欲界にあって悪業を造る凡夫にとつては、あまり意味をもたないといつてよいであろう。なぜならば、凡夫のあり方は常に悪業を作り続けるからであり、その悪の業種子の資助を受けて順次の生があるからである。極論すれば、凡夫の輪廻の実態は欲界内の悪世界においてのみ、行われるといつても過言ではないのである。この連鎖を断ち切るものは、大聖仏陀の加被力以外にない。そこで貞慶は、『命終心事』において「正念安住」と共に「大聖加被」を力説したのである。

註

(1) 『解脱上人小章集』は、日本大藏經六四卷(鈴木財団刊)に収められている。本書は、『閑寂隙』『修行要鈔』『唯心念仏』『観心為清淨円明事』

『命終心事』『臨終之用意』『勸学記』『起請文』『春日大明神発願文』『仏舎利観音大士発願文』の十篇よりなる。奥書の「海住山御草」は二五頁下段、「笠置の上人」は二七頁上段にそれぞれ出る。

(2) 貞慶は、その前半生においては釈迦・弥勒信仰であったが、最晩年になって観音信仰に転入した。いずれも浄土信仰であるところに特色があるが、資糧位菩薩は一の四天下しか知見しえないと貞慶自身が明言している点より、弥勒・浄土信仰と観音・浄土信仰の並立は考えられない。この点より、撰述時期の不明確な書物でも、弥勒が観音の記述があれば、ほぼ時期を推定することができる。なお、貞慶の弥勒信仰と観音信仰については、拙稿「貞慶の浄土観とその信仰―弥勒信仰から観音信仰へ―」（龍谷大学大学院紀要 第六集）を参照のこと。

(3) 大谷大学蔵。

(4) 『成唯識論同学鈔』の「未臨終時」は、大正六六・二三七・上。短釈類については、共同研究『成唯識論同学鈔の研究』（研究主任楠・仏教文化研究所紀要第三六集）に諸寺および大学所蔵短釈の現存一覧を併記しているが、この科文および類似テーマは他に皆無である。なお、生前中は本人の意思があったため名を伏せていたが、この一覧表は実は、今は亡き故弥山礼知氏の力作であることを謹んで紹介したい。

(5) 拙稿「貞慶の浄土観とその信仰―弥勒信仰から観音信仰へ―」（龍谷大学大学院紀要第六集）、同「法相と唯識観」（日本仏教学会年報第五七号）等、参照のこと。

(6) (7) 日藏六四・二四・下。

(8) 日藏六四・二四下・二五上。

(9) (14) 日藏六四・二五・上。

(15) 日藏六四・三三・下。

(16) 大谷大学蔵『論第六卷尋思鈔別要』にはやや異なる同種系の本が二本あり、今回はその内の一本を底本、他の一本を校本とした。

(17) 日藏六四・二五・下。

(18) 日藏六四・二六・上。

(19) 日藏六四・二六・上・下。

(20) 翻刻文一四頁。訓読文一五頁。

(21) 大正二九・四五・下。

(22) 翻刻文一〇頁。訓読文一〇・一一頁。

（楠 淳 證）